

ベトナム学生の就職意向と自己効力感に関する研究

○岡山大学

駄田井 久

ノートルダム清心女子大学 二階堂 裕子

1 目的

1986年のドイモイ政策以降のベトナムでは、グローバル化の急速な進行と所得・教育水準の向上が起こっている。この様な社会情勢において、ベトナムの若者が「どこで、どの様な職を選択し、どのようなキャリアを歩んで行きたい」と考えているのかを明らかにし、その行動をモデル化することが本研究の目的である。

2 方法

2015年8月にベトナム・ダナンの中学生(20名)・高校生(20名)・日本語学校学生(14名)、2016年3月にベトナム・フエの大学生(41名)を対象として質問紙調査を実施した。質問紙は、1) 基本的属性(年齢・性別・両親の職業・海外渡航経験など)、2) 就職先の選好、3) キャリア志向を計測する指標、4) 自己効力感を計測する指標で構成した。キャリア志向は、11指標・5段階評価を用い、仕事内容・自身の評価・職場環境・所得(安定及び高所得)の5項目に要約した。「自己効力感」とは、Bandura(1977)が確立した概念であり、ある課題や場面に直面したときに、「必要な行動をうまくできるだろう」という自分自身がつ信念を表す。本研究では、浦上(1995)が作成した指標を参考に、10指標・4段階評価を用いた(表1)。なお、質問票はベトナム語で作成したものを配布し、その場で記入してもらい当日に回収した。

表1.本研究で用いた自己効力感を計測する10指標

私は一生懸命がんばれば、困難な問題でもいつも解決することができる
私は、誰かが私に反対しても、自分が欲しいものを手にするための手段や道を探すことができる
目的を見失わず、ゴールを達成することは私にとって難しいことではない
予期せぬ出来事に遭遇しても、私は効率よく対処できる自信がある
私は色々な才略に長けているので、思いがけない場面に出くわしても、どうやってきりぬければよいのか分る
必要な努力さえ惜しまなければ、私はだいたいの問題を解決することができる
自分の物事に対処する能力を信じているので、困難なことに立ち向かっても取り乱したりしない
問題に直面しても、いつもいくつかの解決策を見つけることができる
苦境に陥っても、いつも解決策を考えつく
どんなことが起ころうとも、私はいつもその事に対処することができる

3 結果と考察

ダナン・フエのいずれにおいても、海外への進学・就職意向は非常に高かった。キャリア志向では、所得を最も重要視しており、次いで仕事内容、職場環境、自身の評価であった。ベトナムの若者は、「高い所得を得ることができ、自身の能力を活かすことができる」仕事を選好する傾向があることが明らかとなった。自己効力感は、平均3.45・標準偏差0.45であり(4点満点)、ベトナムの若者の自己効力感は非常に高いと推測される。

文献

浦上昌則(1995)「学生の進路選択に対する自己効力に関する研究」『名古屋大学教育学部紀要』42,115-126